HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クラウドファンディングは研究をひらくか ： 学術系クラウドファンディング「アカデミスト」の探索的分析から
Author(s)	齋藤, 芳子
Citation	科学技術コミュニケーション, 39, 1-9
Issue Date	2026-08
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.100332
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100332
Type	departmental bulletin paper
File Information	02_saito.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論文

クラウドファンディングは研究をひらくか ～学術系クラウドファンディング「アカデミスト」の探索的分析から～

齋藤 芳子[1, 2]

Opening Up Research through Science Crowdfunding: Empirical Insights from the Platform “academist”

SAITOH Yoshiko[1, 2]

要旨

学術研究におけるクラウドファンディング（以下，学術系 CF）の利用は，研究者にとって身近なものになってきている．国内でも，学術系 CF に挑戦した研究者への調査，市民の意識調査，実際の学術系 CF プロジェクトの分析などにより知見が蓄積され始めている．本研究では，新たな研究資金源としての学術系 CF の性質を考察することを目的に，学術系 CF プラットフォーム「アカデミスト」を対象に分析を行った．その結果，科研費に加えて学術系 CF を活用しようとする研究者のみならず，従来の研究費制度では資金を得にくい研究者や研究テーマ（例：学問分野の「統合」）も，学術系 CF の恩恵を受けていることが示され，この両者に対する支援メカニズムには違いがある可能性が示唆された．市民による支援判断には，従来のピアレビューと部分的に共通する特徴が見られる一方で，異なる基準に基づいている可能性も示された．研究費を獲得しづらい分野への支援の程度や，学術系 CF が科学コミュニケーションとして果たす役割については，今後の検討課題である．

キーワード：学術系クラウドファンディング，アカデミスト，市民，研究評価

ABSTRACT

Science crowdfunding (SCF) is becoming an increasingly familiar option for researchers seeking funding. In Japan, knowledge is beginning to accumulate through studies on researchers’ experiences with SCF, public perceptions, and analyses of actual projects. This study investigates the nature of SCF as an emerging source of research funding by analyzing the platform academist. The findings indicate that SCF benefits two types of researchers: those aiming to supplement traditional grants such as KAKENHI, and those whose research themes or fields—such as interdisciplinary integration—are less likely to receive funding through conventional systems. The mechanisms supporting these two groups may differ. While citizen supporters’ decisions partially align with traditional peer review criteria, they also appear to reflect distinct evaluative standards.

2025年 9 月22日受付　2026年 7 月16日受理
所　属：1. 名古屋大学教養教育院
　　2. 名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻博士後期課程
連絡先：saitoh@ilas.nagoya-u.ac.jp

The extent to which SCF supports underfunded research areas and contributes to science communication remains an open question for further study.

Keywords: science crowdfunding, *academist*, citizen, research evaluation

1．はじめに

近年，学術研究のための資金調達の手段として，クラウドファンディングが研究者個人にとって身近な選択肢となりつつある．たとえば，科学誌 *Nature* や *Science* ではクラウドファンディングを活用した研究事例が取り上げられ（Lowe 2013; Woolston 2014 など），研究者を対象としたクラウドファンディング活用のノウハウや成功事例の共有が進んでいる．さらに大学組織においても，READYFOR College のようなプラットフォームを通じて研究・教育活動への寄付を募る取り組みが広がっており[1)]，クラウドファンディングは個人・組織の両レベルで学術研究を支える新たな資金調達手段として定着しつつある．

こうした学術系クラウドファンディング（以下，学術系 CF）の興隆については，学術系 CF が近年になって研究資金獲得の補助手段として台頭しており（Schaefer et al. 2018），広く受容される背景には政府資金の縮小と競争激化がある（Aleksina et al. 2019）ことが指摘されている．とくに，研究費の獲得が困難な若手研究者や新規分野の立ち上げにおいて市民からの支援は有効な方法（Vachelard et al. 2016 など）とされ，学術系 CF は競争的な公的研究資金を獲得しづらいようなニッチな分野や萌芽的研究を支える可能性（網中他 2020）に期待が寄せられている．実際に，「多様な資金源が研究の自由度と多様性を高める」との理念のもと，研究者と社会をつなぐことを目的とした学術系 CF プラットフォーム「アカデミスト」が国内で立ち上げられており（柴藤 2015，柴藤 2024）[2)]，学術系 CF の社会的意義に対する関心が高まりつつある．それゆえに，国内の学術系 CF においていかなる研究プロジェクトが支援されているのか，またそれは競争的な公的研究資金の採択傾向とどのように異なるのかを実証的に明らかにする研究が待たれるところである．

一方で，学術系 CF において「非専門家」である市民が資金提供先の研究プロジェクトを選別するという構造については，研究の質や方向性に偏りを生じさせる可能性があるという懸念も存在する．先行研究においても，研究者のアウトリーチ活動や支援者とのコミュニケーションが資金調達に正の影響を与える傾向（石川 2021）や研究者の過去の業績よりもプロジェクトの魅力や発信力を重視する傾向（Sauermann et al. 2019），研究内容よりも研究者の姿勢や人柄に共感して支援を決定する傾向（Ikkatai et al. 2018）などが報告されている．また，市民が「挑戦者の熱意」だけでなく「社会的貢献性」にも共感して支援を決定する傾向（網中 他 2020）や，一般のクラウドファンディングにおいて社会的・環境的課題に焦点を当てたプロジェクトが支援者から好意的に受容される傾向（Calic and Mosakowski 2016; Vismara 2018）も示されている．市民がなにをもって支援を決めるのかについての詳細はさらなる実証研究が求められるところであるが，「アカデミスト」を通じて学術系 CF に挑戦した研究者へのアンケート調査（一方井 他 2018）によれば，「社会的意義」や「わかりやすさ」を重視して学術系 CF プロジェクトを設計しているという結果が得られており，挑戦者の研究の方向性の変容はすでに生じているとみられる．

ただし，学術系 CF を通じた研究の変容や市民との関係性の刷新は，肯定的に論じられることも多い．柴藤（2024）は，研究者が自身の研究の「Vision」を明確に発信することで市民との「共感」を生み出し，研究テーマの社会的意義が再構築される可能性を指摘している．一般的にクラウドファンディングは組織の方向性や制度に影響を与えうる（Escudero et al. 2025）とされており，学

術系 CF についても研究者と市民との新たな関与の形を生み出す可能性（Hui and Gerber 2015 など）が従前から言及されている．いずれにせよ，研究者と市民の関係性は，従来の「研究者＝発信者，市民＝受け手」という構図から脱却しつつあり，このような双方向的な関係性の萌芽もみられる．学術系 CF サイト「アカデミスト」における支援者と挑戦した研究者への調査を通じて，非専門家である市民が研究者の挑戦を支える姿勢をもっていることや，研究者が学術系 CF を通じて研究意欲を高めていることが明らかになっている（太田 他 2024）．つまり学術系 CF は，資金調達と双方向的な科学コミュニケーションの両面において，革新的な存在とみなされていることになる．

これらの研究は学術系 CF が研究者と市民の新たな関係性を築く可能性を示すが，同時にその実現にはいくつかの課題が残されている．たとえば，学術系 CF を一方向的な情報伝達の手段として用いる研究者が多いという調査結果（一方井 他 2018）（ただし，今後研究者の不安を軽減することで双方向的なコミュニケーションツールとしての活用が進む可能性も示唆されている）や，学術系 CF が科学コミュニティによるアウトリーチの新たな手段となりうる一方で，より広範な市民参加を促すには限界があるという指摘（Hase et al. 2022）がある．

そもそも，もし学術系 CF が研究資金の多様化を促進する新たな手段として機能していなければ，双方向的な科学コミュニケーションの可能性についての議論も方向転換を余儀なくされる可能性がある．研究に対してすでに公的資金が投入されている場合，市民による追加的な資金提供の必要性は相対的に低下すると考えられる．そのような状況下での支援の動機や選好の構造は，公的資金が投入されていない場合とは異なる様相を呈する可能性がある．したがって，まずは学術系 CF が資金調達手段としていかなる革新性を有しているのかについて，実証的に検討することが求められる．

本研究では，市民が学術系 CF においてどのような学術研究を支援対象として選択したのかを明らかにし，学術系 CF が学術研究の多様化に寄与しているのかを検討する．調査対象は，学術研究プロジェクトに特化したクラウドファンディング・プラットフォーム「アカデミスト」に掲載された過去のプロジェクトデータとし，提案されたプロジェクトおよび目標金額の達成状況を分析する．とくに，学術系 CF における挑戦内容や達成傾向が，基礎科学分野における主要な競争的研究資金である科学研究費補助金（以下，科研費）といかなる異同があるのかという観点から，学術系 CF が資金調達手段としていかなる革新性を有するのかを検討する．

2. 研究方法

本研究では，学術系クラウドファンディングに特化したプラットフォーム「アカデミスト」のウェブサイトに掲載された過去のチャレンジ（個別の支援募集プロジェクト）情報を対象として，ウェブスクレイピングによるデータ収集を行った．「アカデミスト」には，目標金額達成に至らなかったチャレンジに関する情報も公開されており，目標金額を達成したか否かにかかわらずデータ取得が可能である．本研究ではこのうち，継続的な支援を前提とする月額支援型を除外し，単発型の支援である「スポット支援型」[3] に限定して，そのすべて（277 件）を分析対象とした．スクレイピングには，「オクトパース（Octoparse）」（無料版）を用いた．データ取得は 2025 年 5 月 1 日に実施し，当該日までに支援募集期間が終了しているチャレンジを対象にチャレンジ毎のウェブページの情報を取得した．このうち目標金額を達成した「成功」チャレンジは 243 件であった．チャレンジ全体に対する支援金額総計は 330,486,593 円，支援申込件数（サイト上の表記は「サポーター数」）は 24,596 件，コメント機能へのサポーター（支援者）による書き込み総数は 11,737 件であった．

各チャレンジについて取得した情報は以下の 12 項目である．

・挑戦者（研究者）の属性として「氏名」，「所属（組織名および役職）」

・挑戦内容として「タイトル」,「冒頭説明文」,「目標金額」,「開始年月日」
・チャレンジの経過として「進捗報告数」,「コメント数」（いずれも，支援募集開始からデータ取得日までの累計；のべ数）
・結果として「支援金額」,「支援申込件数（サイト上の表記は「サポーター数」）」,「達成率」（目標金額に対する支援金額の比率［単位：%］),「チャレンジの成否（目標金額達成／未達）」

分析にあたっては，所属，挑戦内容，結果の各項目に対してラベリングを行った（表1参照）．所属については，チームを組んでのチャレンジの場合には筆頭者のものを採用したうえで，職位は「学生（博士前期課程まで）」「博士学生（博士後期課程）」「ポスドク（非常勤講師を含む）」「大学教員（特任を含み客員は除く）」「その他」の5分類，機関種別は「大学・公的研究機関」「その他（NPO，学会，スタートアップ等）」の2分類とした[4]．研究水準の指標として，所属機関について「RU11」[5]「RU11以外」の2分類を設定するとともに，挑戦者が研究者番号[6]を有しているかを科学研究費助成事業データベース（https://kaken.nii.ac.jp/）や各組織公式サイトにより調査し，「あり」「なし」の2分類にラベリングした．

挑戦内容は，タイトルおよび冒頭説明文を参照し，12の学問分野に区分した．この分類は，科研費の大区分11分類に加え，これらに含まれないような「総合」型という区分を1つ追加したものである．またチャレンジの方向性を示す指標として，大学教員に求められる学識の類型（Boyer 1990＝1996）（以下，「学識分類」）に基づき，「発見」「統合」「応用」「普及」の4分類によるラベリングを行った[7]．

挑戦の結果については，達成率に基づき「成功（100%以上）」「不成功（100%未満）」の2分類を用いた．

表1　分析のためのデータラベリング

	ラベル項目	ラベル（括弧内は該当件数，*N*=277）
所属情報	機関種別	RI［大学・公的研究機関］(231)／その他(46)
	職位	学生(29)／博士学生(34)／ポスドク(22)／大学教員(80)／その他(112)
	研究水準	RU11(78)／RU11以外(199)
	研究者番号	あり(175)／なし(102)
挑戦内容	学問分野	A［人文・社会］(67)／B［理学］(23)／C［工学］(29)／D［材料・応用物理］(7)／E［化学］(5)／F［農学］(11)／G［生物学］(40)／H［薬学・基礎医学］(4)／I［臨床医学・看護］(60)／J［情報］(7)／K［環境］(18)／Z［総合］(6)
	学識分類	発見(94)／統合(14)／応用(135)／普及(34)
達成率	成否	成功［達成率100%以上］(243)／不成功［同未満］(34)

3．結果と考察

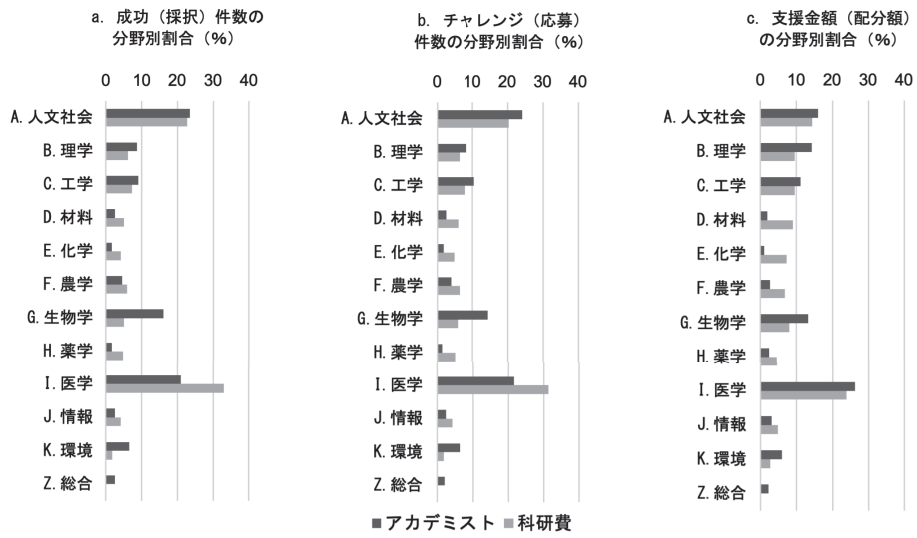
まず，全体の傾向と先行研究との異同を以下に確認する．目標金額の達成については「成功」が88%，「不成功」が12%，達成比（目標金額に対する支援金額の比：同額の場合は1となる）の平均は1.32，標準偏差は0.618であった．達成率上位5件のチャレンジの概要は表2のとおりである．種々の項目について成否との相関係数をそれぞれ確認したところ，成否について検討した先行研究（石川 2021）と概ね相違はなかったが，2020年7月までのデータでは相関が認められなかった進捗報告数と成否について今回は弱い相関が認められ（先行研究（石川 2021）のr＝0.09が本研究では0.20），ポスドクと成否との間のごく弱い負の相関がみられなくなっていた（r＝−0.18 → 0.03）．なお，個人によるチャレンジとチームによるチャレンジとで，成否（r＝0.05）や達成比（r＝0.02）との相関はみられなかった．

表２　達成率上位５件のチャレンジの概要

順位	達成率	機関種別	職位	研究水準	研究者番号	学問分野	学識分類
1	574%	大学・公的研究機関	大学教員	RU11以外	あり	B.理学	発見
2	373%	大学・公的研究機関	大学教員	RU11以外	あり	I.医学	応用
3	364%	大学・公的研究機関	大学教員	RU11以外	あり	B.理学	統合
4	341%	その他	その他	RU11以外	なし	I.医学	応用
5	318%	大学・公的研究機関	大学教員	RU11以外	あり	I.医学	応用

注）第4位については，任意団体としての挑戦であるが代表者はRU11以外の大学の教員である。トップ10でみると，第6位と第10位に博士課程学生によるプロジェクト（いずれもRU11）がランクインし，そのほかはRU11以外の大学教員（研究者番号あり）によるプロジェクトである.

次に，学術系 CF と科研費との性質の差を確認するために行ったいくつかの分析結果について述べる．全体に占める学問分野毎の成功（科研費の場合は採択）件数割合について，「アカデミスト」と科研費（平成 30（2018）～令和 7（2025）年度の新規採択分合計[8]）との分布は概ね類似しているものの，生物学においては「アカデミスト」での成功割合が顕著に高く，医学においては科研費での成功（採択）割合が際立って高いという，対照的な傾向が観察された（図１a）．確率分布の隔たりを示すジェンセン・シャノン距離[9] は 0.269 であり，中程度の分布差が存在する．チャレンジ（科研費の場合は応募）件数も同様の分布になっており（図１b），各分野内の成功比率はほぼ一定であることから，市民は多分野を幅広く支援している．支援金額でみると，理学や生物学などでは「アカデミスト」での金額割合が高く，材料や化学では科研費での金額割合が高いという結果が得られ（図１c），両者の分布には違いがみられた（ジェンセン・シャノン距離　0.267）．これらの結果は，学術系 CF が科研費とは異なる分野構成を呈し，目標金額も分野によって異なる傾向があること，そして市民の選択も科研費採択とは異なっていることを示唆している．



【アカデミスト】成功243件，チャレンジ277件，支援金額330百万円，【科研費】採択200,299件，応募735,254件，配分額495,170百万円.
注）科研費のデータは，科目区分変更以降の2018年～2025年度の新規採択（出典：日本学術振興会「科研費データ」サイト）の総計を使用.

図１「アカデミスト」と科研費との学問分野間比較：応募・採択件数と支援金額

さらに，種々の項目と達成比について，ウェルチの t 検定を用いて分析した（表３）．「アカデミスト」では，目標金額未達のチャレンジは支援を受けられない仕組みになっており，運営会社によ

る種々のサポートの結果，成功が8割以上を占める．したがって，達成比はチャレンジにおける戦略や支援者の反応を映し出す重要な指標である．なお t 検定では達成比の平均値を用いることになるが，これは群全体の傾向把握に適しており，他方で群内のばらつきやその影響が見えづらいため，表中に標準偏差と中央値を併記した．

分析の結果，イノベーション志向の応用研究や基礎研究よりも，細分化された学問の「統合」において達成比が高いという傾向がみられた（$t = -1.992$，$p = 0.066$，*Cohen's d* $= -0.598$）．このことは，公的研究資金が多く投入されている研究とは異なる方面に学術系 CF の意義を見出せる可能性を示している．また，統計的に有意ではないものの，研究者番号の保持（$t = -1.459$，p = 0.146，Cohen's d = −0.175）よりも「RU11」所属（$t = -1.772$，$p = 0.078$，*Cohen's d* $= -0.203$）の挑戦者によるプロジェクトは達成比がやや高くなる傾向にあった．科研費の配分が「RU11」に偏っていることからすれば，ピアレビューによる学術的評価と市民による支援判断とは類似の傾向を示していることになる．その際のシグナルが，威信なのか提案内容（質や説明の明確さなど）であるのかは今後の検討課題である．職位でみると，「その他」はやや不利（$t = 1.733$，$p = 0.084$，*Cohen's d* $= 0.203$）という傾向が認められた．なお，表3では複数の比較を行っているため，多重比較に伴う第Ⅰ種の誤りの上昇を考慮し，Benjamini-Hochberg 法による FDR 補正（$q = 0.05$）を実施した．その結果，「RU11」所属や「統合」区分などの各項目の効果はいずれも補正後には有意ではなかった（$q > 0.10$）．ただし，効果量はいずれも小〜中程度であり，探索的な傾向として一定の関連が示唆された．なお，交絡因子の影響については，現状では標本数の偏りがあるため，今後さらにチャレンジの蓄積がなされてからの課題としたい．

表3　チャレンジの属性と達成比についてのウェルチの t 検定結果表

			基本統計量				ウェルチの t 検定				効果量[注]		
								有意確率	差の95%信頼区間			95%信頼区間	
			度数	中央値	平均値	標準偏差	t 値	両側 p 値	下限	上限	*Cohen's d*	下限	上限
学識分類	統合	0	263	1.220	1.303	0.610	-1.992	0.066	-0.762	0.028	-0.598	-1.138	-0.058
		1	14	1.490	1.670	0.675							
	普及	0	243	1.240	1.327	0.642	0.594	0.555	-0.115	0.213	0.079	-0.280	0.437
		1	34	1.250	1.279	0.413							
	発見	0	183	1.220	1.309	0.589	-0.446	0.656	-0.198	0.125	-0.059	-0.308	0.190
		1	94	1.255	1.346	0.673							
	応用	0	142	1.275	1.362	0.626	1.110	0.268	-0.064	0.228	0.133	-0.103	0.369
		1	135	1.200	1.279	0.608							
機関種別	RI	0	46	1.285	1.292	0.565	-0.380	0.705	-0.221	0.150	-0.057	-0.374	0.259
		1	231	1.240	1.327	0.629							
研究水準	RU11	0	199	1.220	1.286	0.667	-1.772	0.078	-0.264	0.014	-0.203	-0.465	0.060
		1	78	1.290	1.411	0.461							
	研究者番号	0	102	1.230	1.253	0.564	-1.459	0.146	-0.254	0.038	-0.175	-0.420	0.069
		1	175	1.240	1.361	0.645							
職位	学生	0	248	1.240	1.326	0.636	0.451	0.654	-0.144	0.226	0.067	-0.318	0.451
		1	29	1.210	1.284	0.443							
	博士学生	0	243	1.220	1.311	0.631	-0.897	0.374	-0.281	0.108	-0.140	-0.499	0.219
		1	34	1.285	1.398	0.513							
	ポスドク	0	255	1.240	1.328	0.633	0.866	0.393	-0.110	0.272	0.131	-0.305	0.567
		1	22	1.240	1.247	0.398							
	大学教員	0	197	1.220	1.278	0.501	-1.493	0.138	-0.347	0.049	-0.242	-0.502	0.019
		1	80	1.260	1.427	0.833							
	その他	0	165	1.270	1.372	0.668	1.733	0.084	-0.017	0.267	0.203	-0.038	0.444
		1	112	1.220	1.247	0.530							

注) 計算上の標準偏差として，Cohen's dではプールされた標準偏差を使用した．
　標本数が少ないケースもあることから念のためHedges' gも算出してみたところ，その値はCohen's dと小数点以下2桁まですべて同じであった．

加えて，研究者番号を保有する挑戦者による175件に限定して，これまでの科研費採択件数（分担を含む）との各種相関を分析した．達成比との間には相関は認められず（$r = 0.03$，両側 $p = 0.70$），科研費採択に恵まれてきた研究者たちが学術系 CF において有利というわけではないことが明らか

になった．一方で，目標金額（$r=0.37$），支援申込件数（$r=0.41$），コメント数（$r=0.39$）との間に中程度の正の相関がみられた（いずれも，両側 $p<0.001$）．職業研究者としての経験は，支援者の関心や応答に一定の影響を与えているとみられる．なお，職位が「その他」，すなわちアカデミック以外の挑戦者による 112 件のうち研究者番号保有は 71 件あり，その達成比平均は 1.310 で非保有者の 1.138 よりも高かった（$t=-1.528$，$p=0.066$，*Cohen's d* $=-0.327$）．ただし研究者番号の有無はサポーターには開示されない情報であることから，研究者番号に代替するようなシグナルを支援する側の市民が察知していることになる．そのシグナルとしては，提案内容，もしくは他のサポーターの動向などが考えられるところであり，今後の検証が必要である．

4. まとめ

本研究では，学術系 CF が研究の多様性に寄与しているのかを検討するため，「アカデミスト」に掲載された過去のチャレンジデータ 277 件の分析を実施した．その結果，市民が支援する研究には公的研究資金の動向と異なる傾向がみられ，「統合」型のチャレンジが相対的に高い達成比を示した．また，提案されたチャレンジの学問分野別比率は科研費とは異なる様相を呈した．一方，「RU11」所属の挑戦者は達成比が高くなる傾向があり，これは科研費の特徴と類似していた．また，研究者番号の有無は開示されていない情報であるが，これに類する指標を市民側で察知して，アカデミア以外の挑戦者に対する判断に適用している可能性が示された．

これらの結果は，科研費に加えて学術系 CF を活用しようとする研究者，従来の研究費制度では資金を得られない研究者ないし研究テーマ，このいずれもに学術系 CF の恩恵がありつつも，両者に対する支援メカニズムが異なることを示唆している．また，支援者となった市民による支援判断は，従来のピアレビューと部分的に共通する要素を持ちつつも，異なる基準に拠っている可能性を示している．科学研究に対する市民の金銭的支援は，単一の要因では説明できない複雑な現象であると考えられ，本格的な実証研究が待たれるところである．

したがって，学術系 CF は研究の多様性に寄与してきたと判断できる．とくにアカデミア以外の人々に門戸が開かれている点は，シチズンサイエンスの時代にふさわしい特徴である．ただし，科研費と異なるタイプのチャレンジは件数としては少なく，また，アカデミアの職がない場合には達成比が低くなりやすいため，強化するには更なる工夫が必要と考えられる．

なお，学術系 CF が萌芽的研究を支えているのか，科研費を取りづらくなっている基礎研究分野をより支援できているのかについては，今回の研究では扱えておらず，今後の検討課題として残された．さらに，職業的研究者であるかどうかによって市民の反応が異なる兆候がみられており，学術系 CF の科学コミュニケーションとしての性質を議論するための今後の検討課題になると考えている．

謝辞

データ分析についてご助言をいただきました，名古屋大学大学院環境学研究科の丸山康司教授，同大学院教育発達科学研究科の丸山和昭准教授のお二方に，御礼申し上げます．査読者の有益なコメントにも感謝申し上げます．

注

1）参加大学等の詳細は公式サイト（https://readyfor.jp/lp/college/，2025 年 8 月 16 日 閲覧）にて確認できる．

2）「アカデミスト」については柴藤（2015，2024）および公式サイト（https://academist-cf.com/，2025 年

7月1日 閲覧）に詳しい．

3）「スポット支援型」には「購入型」と「寄付型」（寄付金控除対象）があり，達成比との相関は有意でなく（$r=0.09$，両側 $p=0.16$），対応のない t 検定でも有意差は認められなかった（$t=1.30$，両側 $p=0.20$，Cohen's $d=0.227$，95% CI［−0.090，+0.544］）．本研究ではまずは科研費等に着目したが，この2型を含め，さまざまな変数が交差して影響しうることを否定するものではない．ただし，この2型には，いずれもリターンがあること，支援1件ごとの控除額は計算できないこと，全データ数が限られていることなどにより，現状のデータでは詳細な分析に耐えず，網中・吉岡（2020）のようにシナリオサーベイなどの分析手法が望まれる．

4）所属の分類，職位の分類，機関種別の分類（「RU11」/「RU11 以外」）においては，学術系 CF に関する先行研究（一方井 他 2018; 網中 他 2020; 石川 2021; Hase et al. 2022）における枠組みや結果を援用した．

5）「RU11」（学術研究懇談会）は，2009 年設立の研究力強化を目的とする大学コンソーシアムで，現在，北海道大学，東北大学，筑波大学，東京大学，東京科学大学，早稲田大学，慶應義塾大学，名古屋大学，京都大学，大阪大学，九州大学が加盟している．これら 11 大学は科研費獲得額や論文数などにおいて高い実績を有することから，分析上の指標として採用した．ただし，いわゆる有名大学や入試偏差値の高い大学などが必ずしも含まれるものではなく，市民からみた研究水準を示す絶対的な指標ではない．

6）研究者番号とは，府省共通研究開発管理システム（e-Rad）に登録された研究者に付与される識別番号であり，公的な競争的研究資金への応募に必須のものである．1個人は1番号を生涯使用するため，たとえば定年退職後も番号は残ることになる．

7）本研究では，挑戦内容の分類にあたり，Boyer（1990）による学識の4類型（「発見（Discovery）」「統合（Integration）」「応用（Application）」「教育（Teaching）」）を援用し，「教育」を「普及（Outreach）」に読み替えた．この分類は，大学教員の職務における学術的貢献の多様性を示す枠組みとして広く参照されている．なお，「統合」に分類されたのは，「分散型科学で新しいアカデミアを」「哲学者ウィギンズの理論で，法学と哲学を接続する！」「「AI×○○学」で学問はどう変わる？」などである．

8）平成 29（2017）年度以前は科研費の科目区分が異なっており，「アカデミスト」の 2017 年度以前のチャレンジ数が 53 件と全体の2割に満たないことから，平成 30（2018）〜令和 7（2025）年度の新規採択分合計を代替指標とした．

9）度数が少ないため t 検定を行わず，確率分布の隔たりを検討した．

文献

Aleksina, A., Akulenka, S., and Lublóy, Á. 2019: "Success factors of crowdfunding campaigns in medical research: perceptions and reality". *Drug Discovery Today*, 24(7), 1413–1420. DOI: 10.1016/j.drudis.2019.05.012.

網中裕一・吉岡（小林）徹 2020:「日本におけるクラウドファンディングを通じた科学研究支援の動機」『研究 技術 計画』35(1), 77–95. DOI: 10.20801/jsrpim.35.1_77.

Boyer, E. L. 1990: *Scholarship Reconsidered: Priorities of the Professoriate*, NJ: The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching.（E. L. ボイヤー, 有本章（訳）1996『大学教授職の使命: スカラーシップ再考』玉川大学出版部）

Calic, G. and Mosakowski, E. 2016: "Kicking off social entrepreneurship: How a sustainability orientation influences crowdfunding success". *Journal of Management Studies*, 53(5), 738–767. DOI: 10.1111/joms.12201.

Escudero, S. B., Anglin, A. H., Allison, T. H., and Wolfe, M. T. 2025: "Crowdfunding: A Theory-Centered Review and Roadmap of the Multidisciplinary Literature", *Journal of Management,* online first. DOI: 10.1177/01492063251328267.

Hase, V., Schäfer, M. S., Metag, J., Bischofberger, M., and Henry, L. 2022: "Engaging the public or asking your friends? Analysing science-related crowdfunding using behavioural and survey data", *Public Understanding of Science*, 31(8), 993–1011. DOI: 10.1177/09636625221113134.

Hui, J. S. and Gerber, E. M. 2015: “Crowdfunding science: Sharing research with an extended audience”. *Proceedings of the 18th ACM Conference on Computer Supported Cooperative Work & Social Computing* (14 March 2015), ACM, 31–43. DOI: 10.1145/2675133.2675188.

一方井祐子・マッカイユアン・横山広美 2018:「日本の研究者たちは何を重視してクラウドファンディングへの支援を呼びかけたか: 第 4 のファンディングの可能性」『科学技術コミュニケーション』24, 55–67. DOI: 10.14943/86614.

Ikkatai, Y., McKay, E. and Yokoyama, H. M. 2018: “Science created by crowds: a case study of science crowdfunding in Japan”, *JCOM,* 17(03), A06. DOI: 10.22323/2.17030206.

石川寛和 2021:『日本における学術系クラウドファンディングにおける資金調達の成功要因の分析』プロジェクト研究論文（MBA），早稲田大学. URL https: //waseda. repo. nii. ac. jp/record/65411/files/WasedaBusinessSchool_mba_2020_1003_57193005.pdf,（2025 年 8 月 16 日 閲覧）.

Lowe, D. 2013: “Crowdfunding research”, *Science* (Blog). https://www.science.org/content/blog-post/crowdfunding-research,（2025 年 8 月 16 日 閲覧）.

日本学術振興会:「科研費データ」. https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/27_kdata/index.html,（2025 年 11 月 15 日 閲覧）.

太田英暁・谷水城・柴藤亮介 2024:「支援者と実施者，両面からの日本国内の学術系クラウドファンディングの特性検討」『科学技術コミュニケーション』35, 25–42. DOI: 10.14943/111790.

Schaefer, M. S., Metag, J., Feustle, J., and Herzog, L. 2018: “Selling science 2.0: What scientific projects receive crowdfunding online?” *Public Understanding of Science*, 27(5), 496–514. DOI: 10.1177/0963662516668771.

柴藤亮介 2015:「学術系クラウドファンディング・プラットフォーム「academist」の挑戦」『情報管理』57(10), 709–15. DOI: 10.1241/johokanri.57.709.

柴藤亮介 2024:「人文・社会科学とクラウドファンディング: 中央集権から分散型研究推進体制へ」『研究 技術 計画』39(3), 281–294. DOI: 10.20801/jsrpim.39.3_281.

Sauermann, H., Franzoni, C., and Shafi, K., 2019: “Crowdfunding scientific research: Descriptive insights and correlates of funding success”, *PLoS ONE*, 14(1), e0208384. DOI: 10.1371/journal.pone.0208384.

Vachelard, J., Gambarra-Soares, T., Augustini, G., Riul, P., and Maracaja-Coutinho, V. 2016: “A guide to scientific crowdfunding”. *PLoS Biology*, 14(2), Article e1002373. DOI: 10.1371/journal.pbio.1002373.

Vismara, S. 2018: “Sustainability in equity crowdfunding”. *Technological Forecasting and Social Change*, 141, 98–106. DOI: 10.1016/j.techfore.2018.07.014.

Woolston, C. 2014: “Secret to crowdfunding success: build a fanbase”. *Nature*. 2014 年 12 月 18 日. DOI: 10.1038/nature.2014.16608.